NPO JCP
Japan Conservation Project

NPO JCP NEWS

No. 2
2002. 6. 1

・理事挨拶
・韓国 国立中央博物館 中央アジア壁画保存修復プロジェクト
　報告-大谷探検隊将来壁画修復協力プロジェクトに参加して
　記事－韓国国立中央博物館新聞 第365号（2002年1月1日付）より
・世界の修復界は今ーー韓国ーー
・シリーズ 保存修復の現場から
　「電子媒体をいかに長持ちさせるかが課題です」
　　コラムーークラシックフォトプリントの楽しみ
・新刊紹介『文化財害虫事典』
・JCP事務局通信

ご挨拶

初めてお目にかかります。この度、理事長の三輪嘉六先生にお声を掛けられ理事となりました増澤文武です。出土遺物の保存処理、民俗・民族文化財の保管上の調査と保存処理など、ほぼ30年実施してきました。出土遺物や民俗文化財をなぜ保存処理をせねばならないか、処理法の開発と実際にどうすべきか調査・研究、どのようにして保存処理するかという説明を始めた黎明期から、現在、関係者の間では、出土遺物や民俗文化財は、その材質や劣化状態によって保存処理をし、修復せねばならないことが一般化しました。

また、かつての経済優先の時代の反省から、また高齢者社会への移行により美術館・博物館など文化財へ目を向ける方々が増えております。正倉院展は基より、雪舟展や横山大観展などは大変な人手で展観もままならないような情況です。また、発掘現場の現地説明会に訪れる方々も増加しております。勿論、最近はフィレンツェの絵画修復や源氏物語の絵巻物などの分析、キトラ古墳の壁画の状態と保存処置の必要性などの番組が組まれ、以前に比べますと一般の方々の目にするところは増えています。しかし、まだ一般の人々まで、保存処理や修復の世界が浸透したとは言い切れません。一般の方々の中には“博物館や資料館などでは展示・保管のための処置が取られ、中には保存処理・修復がなされているようだ”ということを知っておられる方々も増えてきていると思います。しかし、それは専門の特殊な世界なのだという第三者の目のように思います。もちろん、文化財を対象とした保存処理・修復は専門的な知識と技術を必要とします。しかし、それを支え、推進する分野については、むしろ、一般の方々が参加し文化財を保存管理して将来に向けてすばらしものを残して行くのだという世界を作ることができると思います。保存処理・修復の仕事の性質と割り振りを考える中で、より一層幅を広げ、一般の方々の参加を得て実行に移して行くことが出きることを期待したいと思います。そのことは、今ある文化財の保存処理・修復・メンテナンスの世界をもっともっと拡げることができ、文化財の保存上の危機を乗り越え、また、文化財の保存・修復を学んだ学生の将来をも拡大されることを期待します。どうか皆さん、ご入会いただき、一緒に文化財の保存を考えましょう。微力ながらお手伝いできたらと思います。

特定非営利活動法人　ジェー・シー・ピー
理事　増澤　文武

韓国　国立中央博物館　中央アジア壁画保存修理協力プロジェクト

平成14年6月、韓国と日本の共催によるサッカーワールドカップが開幕しました。日韓は複雑な歴史を乗り越え、今真の友好国として出発しようとしています。

文化財修復の分野でも、そんな時代の流れに歩調を合わせるかのような協力関係が強化されており、JCPは韓国国立中央博物館の所蔵する中央アジア壁画の修復作業に協力することになりました。

これらの壁画は日本の大谷探検隊が13年間（1902～1914）かけて収集したもので、戦中に分割され、韓国国立中央博物館、旅順博物館、東京国立博物館に分かれて収蔵されています。60余点を所蔵する韓国国立中央博物館では、2005年度にヨンサンに移転開館予定の新館での展示をめざし、保存計画を立てることになりました。そこで、保存作業の経験がある我が国の機関や専門家たちとの共同研究を通じ、壁画の保存技術の蓄積と壁画保存専門家を養成することになり、2001年にはまず試験的に小さい壁画2点の保存作業に取り組むことになりました。

この事業に関しJCPは、韓国と研究交流の協定を結んでいる独立行政法人文化財研究所　東京文化財研究所に推薦される形で、中央博物館に修理の専門家を派遣しました。派遣の目的は、壁画を実際に修理する韓国側の人材に対し技術移転するというものです。その模様が、韓国国立中央博物館の機関紙に取材されました。その記事を日本語訳して転載させていただくと共に、派遣された専門家・山本会員に、現地の様子をレポートしていただきました。

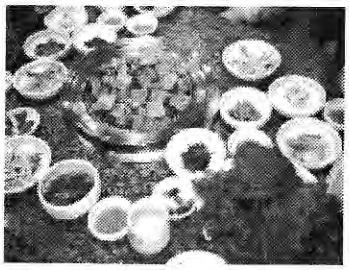
報告 -- 大谷探検隊将来壁画修復協力プロジェクトに参加して **********

JCP 会員　　山本記子

平成１３年１１月、１２月、NPO JCPの派遣修復技術者として、韓国中央博物館所蔵大谷探検隊将来壁画の修復指導に行ってまいりました。ここでは一技術者として、現地の印象をお伝えしたいと思います。

仕事のために、知らない土地を訪れると観光では味わえない出会いや生活観に触れることがあります。短期間であってもそこで働く人々と１つの具体的な仕事を軸にして意見を交換し合えた日々があると、まるでそこに住んでいたと錯覚するほどに懐かしくなったりします。仕事以外の場には、1日のツアーで廻るほどにも出かけていない筈なのですが、帰ると『本当に良い所だからぜひ行ってみたら！』なんて友人に勧めしている自分に気づきます。日本国内での出張でも、外国への出張でも同じ気持ちを経験してきました。

今回のソウルの後も、博物館の帰り道に立ち寄った巨大な書店や裏路地の美味しそうな食べ物屋の軒先がふと思い出されて、すぐにそこにいけないのが不思議なぐらい親しい気持ちがよみがえります。こんなに楽しそうなことが書けるのも、韓国側の博物館のスタッフと日本側の東文研・青木部長率いるNPOのスタッフが苦労しながらも協力して壁画の修理を進めることが出来たからです。仕事での成果なしには、いくら美味しい韓国料理もあんなには食べられません！



ソウル中央博物館は2005年の新館オープンに向けて今は仮の建物で展示や保存の仕事がなされているのですが、『仮の』とは思えない充実した展示が行われていました。そのオープンに合わせて展示する壁画を修理するため、韓国側の技術者に技術伝達するというのが私たちの役割でした。

私たちを招いてくださった保存修復室には、分析機器をはじめとする設備とそれらを使って作業を進めるスタッフが充実しており、レポートや年報などの出版が積極的に行われており、修復スタッフの養成システムも確立しており、こちらの方が教えられることが多々ありました。私たちも早速に博物館ニュースのインタビューを受けることなり、自分たちの立場や仕事を的確に話す訓練の不十分なわれわれはすっかり戸惑ってしまいました。

韓国の人は見た目には顔も姿も日本人に似ていますが、はっきりと自分の言葉で、自分の考えを伝える感覚は日本人より勝っているように思えました。仕事を理解してもらうためには、誠実に良い結果を出していくことが大切ですがそのための作業の経過を説明できることも同じぐらい大切です。言語が違えばその文化背景も違います。ひとつの作品を修理し保存を念頭に置いた上で展示できる形に仕上げるには、現在の所有者〔博物館〕と話し合うことが大

切ですが、それと同じぐらい美術品の伝来や歴史を知ることも必要です。

韓国と日本の難しい関係もしばしば耳にし、考えることですが、私たち修理技術者が作品を将来に残すために試行錯誤しながら方法を選んでいく過程は、韓国の保存科学者や技術者とも同じです。韓国側の考え方に感心したり日本の方法を一緒に試みたりと言葉を超えて体が動き仕事が進み始めると、文化財の仕事をする人間たちという大きな和の中に韓国も日本もなくなります。

さらに忘れてはならないのは、今日こうした交流を行える背景に、今まで韓国と日本の間に立って地道な努力をされてきた方々の存在があるということです。それが今回、国立中央博物館と私達の橋渡しをしてくださった、東京文化財研究所の渡邊明義所長、青木繁夫修復技術部長です。さらに私達技術者が心おきなく活動できる背景には、JCP の会員となってくださった方々の支えがあります。JCP の非営利を旨とした活動方針によって、ひたすら文化財のためを考えて作業に専念し、思いを一にする海の向こうの仲間たちと、忌憚のない意見を交わすことができたのだと思います。

1 日の仕事が終わり、辛い韓国料理に舌鼓を打ちながらビールで乾杯する－この仕事をして良かったとつくづくと思うひとときです。

韓国国立中央博物館新聞 第365号（2002年1月1日付）引用

インタビュー 韓日保存共同研究のため訪韓した山本記子氏、大林賢太郎氏

国立中央博物館は、日本の東京文化財研究所と共同で「国立中央博物館所蔵＜中央アジア壁画＞保存に関する共同研究」を実施する。今回の共同研究は、壁画保存専門家の養成および訓練、ヨンサン（龍山；ソウル市内の地名）に新しく設立予定の博物館に展示される壁画の保存のために設けられたものである。本誌は、今回の研究のために訪韓した日本の専門家2名にその研究の過程と意義についてインタビューしてみた。

1．こんにちわ。まず、韓国を訪問なさった感想は？

大林：私は、今までに20回ぐらい韓国を訪問しています。13年前、陀羅尼経と華厳経の保存のため、国立中央博物館で作業をした経験があります。

山本：私は4度目の訪問なのですが、国立中央博物館の保存室の先端資材、そして各部門別専門家たちの仕事ぶりがとても印象的でした。

2．個人的な紹介をお願いします。

山本：私達は共に、非営利の文化財の保存を支援するための機構であるNPO JCP所属の会員です。私は個人的に民間企業である東京修復工房を運営しています。※

大林：私もNPO JCPの会員で、フリーランサーとして文化財保存と関連した仕事をしています。JCPは去る3月に設立されたもので、文化財保存分野の情報交換、そして技術提供のためのネットワークです。

3．今回の訪韓の目的とスケジュールを教えてください。

山本：ここに所蔵されている中央アジア壁画についての韓・日保存共同研究に参加するために訪問しました。私は、15日ごろまで、大林さんは22日までここに滞在し、壁画の修復作業を進めていく予定です。

4．日本の保存システムの実態はどのようなものですか？

山本：全般的に、国ごとに独特なノウハウを持った分野があることを指摘できます。日本は東洋画、壁画等東洋地域で生成された文化財の修復に優れていると言えます。韓国の場合は、金属の保存技術が優れていると聞いています。日本も陶磁器や漆のような分野における技術開発のために努力しています。

5．今回の共同研究で実現したいことがあるとすれば？

山本：違う分野の保存研究チームとの技術的な交流が活発に成し遂げられればと思います。
大林：私もさらに多くの情報交換、技術交流を持たなければならないと思います。壁画の保存から始まって、博物館の環境問題等、多様な問題についての意見が交換されるようになり、共に発展できたらいいと思います。

6．保存分野に志願する学生は多いですか？

大林：かなり多いですね。しかし、日本でも保存分野に志願する学生たちの多さに比べ、研究所や博物館職員の募集が多くはなく、就職や研究に困難が多いというのが現状です。NPO であるJCP の活動が社会的に定着し、この問題が解消されるであろうことを期待してやみません。

7．最後に個人的な希望や抱負をお聞かせください。

山本：私は東洋画、絵画の分野でさらにグレードアップしたスキルを備えたいと思っています。共通分野の人たちと共に研究できる場がもっと多くなることを願っています。
大林：今は、NPO が日本で優秀な人材を有する団体として、社会に認知してもらうことに力を入れていく計画です。そのようになれば、自然と後進養成、技術伝達等にも大きな成果があることでしょう。

日本語訳：本多　亮
（静岡県立大学　国際関係学部）

※現在山本会員は、自身が代表を務めていた東京修復工房を閉じ、修復技術支援スタッフとして東京国立博物館保存課に勤務している。

＝世界の修復界は今＝＝＝　第1弾　韓国＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

文化財の保存修復事業というものも、国によってシステムも考え方も違います。また、それぞれの人材養成の方法にも差があります。こうした違いはそれぞれの文化の違いであり、国民性、民族性の差であったりもするのです。こうした違いを知ることで、日本のシステムや方法も改めて考えてみることが出来るのではないでしょうか。
このコーナーでは世界に散らばるJCP会員に、いろいろな角度からその国の文化財保存修復界の現状をレポートしていただきます。第一弾として、韓国靖齋文化財保存研究所を主催する朴智善さんにお話を伺いました。

韓国での文化財の保存修復の中心はどこで行われていますか？

国立文化財研究所、国立中央博物館、三星文化財団（湖巌博物館）などが大きな組織ですが、私（靖斎文化財保存研究所）のような個人工房もあります。

文化財の保存修理はどのような仕組みで行われていますか？

国指定の作品は、場合にもよりますが、国が７割、自治体が３割という様に補助金がつきます。自治体の指定品などでは国の負担率はもっと低くなります。
いずれの場合でも、所有者なり自治体の担当者が業者を決めて、文化財庁（日本の文化庁に相当）の専門委員会に諮り許可を得ると進められます。業者（技術者）は文化財庁が行う文化財修理技術者及び技能者認定試験（建造物、青丹・表具保存技術者などの種類がある）にパスしていることが条件です。しかし、実際には実績等も要求されるので、さらに狭い門といえるでしょう。

次に文化財保存の人材養成についてお聞きします。なにか確立されたものはありますか？

日本と同じです。特に定まったコース、ルートはありません。それぞれが、工房に勤めて修行するとか、海外へ留学して実務経験を積んで帰ったり、関連大学で頑張ったりという中から育っていきます。

日本では近年増えてますけれど、文化財関係の大学はたくさんあるのですか？

そうですね、韓国でも増えつつあります。
具体的には私が教えている龍仁大学や慶州大学・韓西大学・公州大学などに文化財関係の学科があり、そのうちの龍仁大学や韓西大学・公州大学、それに中央大学にも大学院にコースがあります。大田保健大学という２年制の専門学校でも文化財関係のコースがあると聞いています。
でも、こうした大学や大学院が出来ても、やはりそこを卒業した人が就職する先がほとんどないのが現状です。

それは、日本でも大問題です。教育現場としての問題点は何ですか？

教育面での問題点は、「もの」に対する愛情などといった精神面での教育が不十分な気がします。データを出したり、研究をすることが最終的な目的ではないことをもう一度ちゃんと教えなくてはならないのではないかと思います。

なんだかほとんど日本と同じですね。

話は変わって、朴さんが日本で修復の勉強をしようと思ったきっかけはなんですか？

日本で勉強しようと思ったのは、勿論修復の技術が進んでいると聞いていたからですが、それ以外にも理由があります。

韓国の装潢の技術は植民地時代に日本から来た表具屋さんの技術で駆逐されたようになっています。日本の技術を学ぶことで、韓国の独自の技術を識別できるようになるのではないかと思ったわけです。実際、韓国に帰って「もの」からそういった（韓国独自の）技術が読みとれることも多く、そういうことに出会うことが私にとって幸せといえるでしょう。

日本では、技術は勿論ですが、考え方を学べたことが良かったと思っています。そして、日本の色々な人と知り合えて、交流ができたことも大きいです。

韓国では文化財修理に関して、これからという部分も多いと思います。でも、各国の文化財を取り巻く環境、技術、それが作られた精神のようなものはそれぞれ違います。そもそも、その文化財を守り伝えてきた考え方、習慣も違うのです。それぞれの個性というか特殊性を抜きにして、単一化してしまうのは危険なことだと思います。文化財を保存する事に関しても韓国には韓国の独自な考え方や方法論があっても良いのではないかと思います。そういった事をお互いに認めあえるような関係としておつきあいしていけたら良いと思います。

朴智善 さんプロフィール

1979年	ソウル大学校美術大学卒業
1981年	ソウル大学校美術大学大学院修士課程終了（東洋画専攻）
1986～1993年	日本（株）岡墨光堂で修復を勉強
1994年	靖斎文化財保存研究所（工房）設立
〃	国立中央博物館修理室入所
1995～1996年	ソウル大学校時間講師
1997年～	龍仁大学教授

保存修理の現場から～～～～～～～～～～～～～～～～

「電子媒体をいかに長持ちさせるかが課題です」

東京都写真美術館保存科学専門員　荒井　宏子さん

アメリカ留学を機に保存の道に

荒井さんが、写真の修復保存に関わるようになったのは、１９８４年にアメリカへ留学したのがきっかけである。文化庁の「芸術家在外研修員」としてだ。当時、荒井さんは千葉大学工学部写真工学科（現・情報画像工学科）の研究室に勤めていた。あのアラーキーが出たところである。１９６３年、東京工芸大学の前身である東京写真短期大学を卒業して以来、文部技官としてずっと同研究室に勤務していたのだが、一度は海外に出てみたいと応募した。でも、どう拡大解釈しても芸術家・カメラマンではないことは明らかだ。

「まともにやったら通らないでしょ。そこで、写真の保存のジャンルで応募したら、まんまとパスしてしまったの。」

というわけだ。

そのころ、といっても今から１８年ほど前のことであるが、日本には写真の保存という概念はほとんどなかった。唯一、修復の分野で数少ない欧米の文献を頼りにしていたぐらいだ。それも褪色したモノクロ写真の色を、化学的にいかに元の色に近づけ修復するか、といったものだった。

だが、ロチェスター工科大学画像保存研究所と、ジョージ・イーストマンハウス国際写真博物館での一年間の研修で大ショックを受ける。アメリカでは、とっくの昔に化学的処理による写真の修復などは行われなくなっていたのである。それはかえって劣化を速めるばかりなのだ。褪色したものは、その状態で長く保存できるようにすることに主眼が置かれていた。その保存も和紙や和糊を使って手作業でやるというものだ。

・東京写真短期大学写真工業科卒
・千葉大学工学部写真工学科（現情報画像工学科）文部技官に就任
・1994年6月より東京都写真美術館保存科学専門員

帰国後、日本写真学会などを通して欧米の写真保存技術の現状などを話した。また、日本には保存について語れる人材がいないので、アメリカやカナダから写真保存の専門家を招いての講演会を企画した。

「当時は人が集まらないで困りました。でも、回を重ねるたびに参加者が増えました。最近、ようやく博物館や美術館でも写真の保存修復ということに目を向け始めたというのが本当のところではないでしょうか」。

昔のお蔵が理想的な保存場所

さて写真の保存技術だが、口でいうのは非常に簡

単だ。温度と湿度と空気質をいい状態に保つこと。これに尽きる。空気質は、最近ヘルシー志向の面からもよく取り上げられている。環境が悪化した都会では空気は酸性に陥っているが、健康のためには中性がいいのだ、というあの空気質である。写真にも中性がいいらしい。では、これらを実現するために具体的にどうするか。そこに保存のサイエンスとテクノロジーと経験がある。個々の写真に合った包装材料の研究や選択、立地や気候を考慮した収蔵室のあり方などなどだ。

では、家庭での保存はどうしたらいいのだろう。両親や祖父母の若い頃の貴重な写真の１枚や２枚はあなたの家にもあるに違いない。荒井さんは、さらりと、でもすばらしいアドバイスをしてくれた。

「家にある８０年や１００年前の写真が劣化していなかったら、そこにそのまま置いておく。だってそこが一番いい状態を保てるところなのだから。もし、劣化していたら保存場所を変えてやります。湿度は６０パーセント以下。それ以上だとカビが生えてきます。そして、温度は低ければ低いほどいい。実際、マイナス１８度で保存している研究所もあるんです。今の家は新建材が多く、そこから化学物質がでるのでその影響の少ない場所に保存します。具体的には、床から６０センチ以上離れた涼しく薄暗い場所が良いのです。そう冷暗所と呼べる所です」。

これらの条件を満たした理想的な場所が、実は昔のお蔵なのだという。蔵の中に雑然とがさっと置かれていたものが一番保存状態が良いそうである。密閉生が高く、冬は暖かく、夏涼しい。人が住みやすい現在の家は文化財にとっては、最悪の環境なのだそうだ。

デジタル化の波の中で

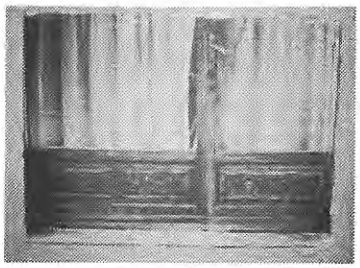
現在、荒井さんは東京都写真美術館の保存科学専門員である。長く勤めた千葉大学から、開館を翌年に控えた１９９４年６月に移ってきた。そして今、インクジェットプリンターからプリントアウトされた写真画像の耐久性テストに関わっている。

「最近は、アナログ写真よりデジカメが主流になってきました。美術館にもプリンターで打ち出されたものが収蔵されつつあります。たとえば、報告書に添付された写真などもそうです。それがすぐに劣化してダメになったら困ります。でも、どこもテストしない。時々刻々、新しい製品が出てくるから。そこを何年持つか、きちんとした評価基準を作れたらと思っています」

アナログからデジタルへ。その流れは写真の分野にも急速に訪れている。写真をデジタル化して残せば、いいじゃないか。そんな議論が写真保存の専門家の間で話しあわれたことがある。ガラス乾板がいい例だ。重いし場所を取るし割れやすい。それをデジタル化して保存すれば簡単ではないか、というのである。しかし、現時点では否定的な見解が多い。システムが変わったら、あるいは記憶装置が壊れてしまったら読めなくなるという危惧がある。貴重な古典的資料の保存にデジタルはまだそれほど信頼度がないのだ。メーカーは３０年は持つといっているが、まだそれだけの年月が経過していないから誰も何ともいえないのだ。実際、ある新聞社は自社の貴重な写真資料の保存のデジタル化を途中でやめてしまった。「それに、写真の印画紙や包装材料そのものにも歴史的文化価値があるんですよ。単なるデジタルの数字だけで保存しても意味がない場合もあります。」と荒井さん。

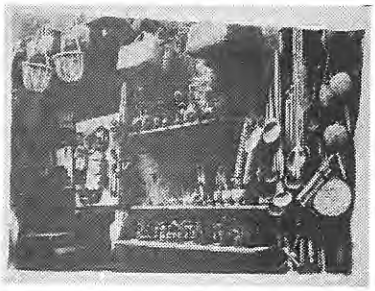
１８３９年に世界で初めて銀盤写真が発明されてから１６０年。ようやく写真が文化財になったと荒井さんはいう。そして新しいテクノロジーの出現に伴い、新たな保存技術の模索も必要になってきた。荒井さんが「電子媒体をいかに長持ちさせるかが今後の課題です」という所以がそこにある。

クラシックフォトプリントの楽しみ ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊



クラシックフォトプリントとは何か。一言で言えば古典技法を使ってプリントするのだ。まず普段自分が使っているカメラで風景や人物を撮影する。それを今は使われていない、あるいは文献だけに残っている古い現像と焼き付けの技術で、プリントするのだ。保存科学専門員の荒井先生が得意とするのが、実はこのクラシックフォトプリントである。

印画紙も手作りで。たとえば1850年にフランスで発明された鶏卵紙。卵白と食塩を混ぜて紙に塗布して印画紙にするものだが、それを自分で再現して、現像焼き付けをする。するとどうだろう、これまでの写真の概念をぶちこわすような作品ができあがった。「これが写真なの」と初めて見た人は驚くに違いない。



荒井さんが「芸術家在外研修員」という肩書きでアメリカ留学する際その時の審査委員（後に東京都写真美術館初代館長）から「やはり、とりあえず1回ぐらいは個展の実績を残してくれないとね」と言われ、このクラシックフォトプリントで個展を開催した。それが、アメリカやブルガリアなどでも開催するほどになり、数年前には、その作り方を書いた「手作り写真への手引き－－クラシックフォトプリントを楽しむ」題する本を写真工業出版社から上梓するまでになった。

●新刊紹介

文化財の大敵・害虫についての初の体系的書物
「文化財害虫事典」（東京文化財研究所編・本文２３１ページ・クバプロ・５０００円）

文化財の大敵といえば、まず一般の人が頭に思い浮かべるのが火災である。しかし、それと同じように深刻なのが虫による害である。古文書が失われる量は、火災によるよりも害虫による方が多いといわれている。とくに我が国は温暖多湿で昆虫の種類や個体数が多い上、文化財は木材や紙、布、糊などでできているものが圧倒的に多いので、昆虫の餌や営巣場となって被害を受けやすい。

しかし、これまでその害虫について述べられた書物は皆無といってよかった。それは臭化メチルという名の薬剤が、害虫の駆除に強力な効果を発揮してきたからだ。だが、1997年のモントリオール議定書締結国会議で、臭化メチルが2004年末までに全廃されることが決まったのである。フロンガス同様、オゾン層を破壊するという。これは我が国の文化財保存の動きにも大きな影響を与えるものであった。新たな代替法を模索しなければならない。「これまで昆虫の図鑑や解説書は数多く出版されているが、文化財保存の立場から執筆されたものはない。1997年のモントリオール議定書締結国会議の結果を受けて、我々は文化財のための現場で簡単に使える害虫図鑑をつくることが、まず必要なことであると考えた」と三浦定俊・同研究所保存科学部長は述べている。

出版までに5年がかかったが、それだけ労作である。最近、美術館や博物館におけるＩＰＭ（Integrated Pest Management）ということがいわれている。IPMとは総合的害虫管理と訳されているが、本書はその指針となるべき最初の貴重な文献といえるだろう。

本書は、序論、各論、総論に分かれている。序論では、木材、竹材、紙財というように文化財の材質ごとに主要害虫の加害習性を述べ、各論では、シミ目、ゴキブリ目、シロアリ目など9目の昆虫各種について解説、総論では駆除法について論じている。各論では加害虫の重要度ランク付けや害虫の大きさを一目で把握できるよう実物大の資料画をつけている。その他、害虫の和名、学名のほか、薬剤、防除法の索引が巻末に掲載されている。

（フリージャーナリスト・浜名　純）

ＪＣＰ事務局通信

事務局日々

2002.1.4　仕事始め
2002.1.20　運営会員会議（出席者10名）　事業計画確認
2002.1.25　NPOサポートセンター交流会出席
2002.2.8　東京文化財研究所　渡辺理事長へ、JCPの外部評価委員就任依頼
2002.2.27　理事会（理事４名、事務局1名）　運営会員会議の結果を承認、新理事として、伊原惠司先生に承諾いただいた旨を報告
2002.3.16、17　岐阜県美術館調査
2002.3.22　市民活動団体　たてもの応援団と交流
2002.3.29　日通へ、社員教育用教材（太巻＆巻子）納入
2002.4.27～30　台湾　鹿港龍山寺彩色剥落止め支援へ
2002.5.4、5　愛知県立美術館調査

ホームページアドレス、メールアドレス変更のお知らせ

ホームページアドレス、メールアドレスが下記のように変更となりました。
ホームページアドレス：www.jcpnpo.org
メールアドレス　　：jimukyoku@jcpnpo.org

JCPのホームページはもう見ていただけましたか？若い登録会員が、忙しい合間を縫って作成してくれました。最近一般用の掲示板と、登録会員向の掲示板が開設されました。一般用掲示板は、ホームページを訪問した方は誰でも書き込みOKです。登録会員向の掲示板を利用するにはIDナンバーとパスワードの登録が必要です。登録は簡単ですので、ホームページの指示に従って登録してください。こちらは専門家同士の情報交換を目的としました。

事務局も人手不足の折、会員同士の交流会や講演会など開きたいと思っているのですがなかなか思うに任せません。せめてこの掲示板を利用して情報を発信していきたいと思っています。

会員の皆様も、文化財保存修復に関する疑問質問などありましたら、どんどん掲示板を利用してください。会員相互の活発な交流を期待しています。

ご入会ありがとうございました。

（平成１４年６月１日現在入会者数）

□登録会員　８５名（運営会員を含む）

□一般会員　８７名

□賛助会員　　１１件

㈱岡墨光堂
㈲坂田墨珠堂
昭和不動産株式会社
日本通運株式会社　美術品事業部
羽生　卓史
百元　節
㈲文化財保存
溝川商店
他　個人３名（アイウエオ順・敬称略）

ご寄附をありがとうございました。

・長田　玲子様　・鈴木　伸治様　・滝田　揚子様

NPO JCP の活動に参加してみませんか？

□ 登録会員：年会費 7,000 円
文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。
登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。

□ 一般会員：年会費 5,000 円
この法人の目的に賛同し、支援する個人。

□ 賛助会員：年会費 一口 50,000 円
この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

会員特典　・季刊情報誌の送付
・講演会／研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。

TEL/FAX：03-5832-5440
E-mail:　jimukyoku@jcpnpo.org　URL:　www.jcpnpo.org

※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用下さい。

・郵便振替　00120-4-10545 NPO JCP　・みずほ銀行 根津駅前支店 普通預金 1727893

NPO JCP NEWS
第2号
2002年 6月 1日発行
特定非営利活動法人 ジェー・シー・ピー
〒113-0031
文京区根津2-18-6-102
TEL/FAX：03-5832-5440
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL : www.jcpnpo.org

＜理 事＞
三輪嘉六（理事長）
大林賢太郎（副理事長）
増澤文武
白井久明
伊原惠司

＜外部評価委員＞
渡邊明義

＜編集協力＞ 浜名 純（牧童舎）

＜事務局＞
・大林賢太郎・八木三香